

Prologue

自らも被爆しながら救護活動をした看護師の語り

The story of a nurse who survived the atomic bomb and acted as a staff aide

宮崎 トミホ

Tomiho MIYAZAKI

元長崎大学病院看護師長

A former head nurse, Nagasaki University Hospital

光とともに一瞬にして倒壊し、炎となり、阿鼻叫喚の巷と化した昭和20年8月9日を忘れることはできない。

毎年8月9日は長崎大学医学部主催による教職員、学生合同の慰霊祭が行われており、原爆で犠牲になられた方々のご遺族、元職員の方々とともに犠牲者のご冥福をお祈りしている。毎年出席しているが、お会いする方がだんだん少なくなっており、淋しい限りである。

1. 原子爆弾投下前の病院の状況

昭和20年7月29日の空襲の後、外科病棟では地下室の器械を外に出して、マットレスを壁側に立てかけて高く積み、畳を敷いて全部患者を地下室に移動させていた。8月1日に直撃弾が落され長崎市と大学病院が空襲にあった。そこで退院可能の患者さんは出来るだけ帰ってもらうという大学の方針となっていたので、入院患者は少なかった。

2. 原子爆弾投下

9日朝8時頃、空襲警報のため入院患者を地下室に避難収容した。私は看護室で急ぎの書類を整理中に爆音を聞いた。「空襲警報は解除したのにおかしい」と思ったが、反射的に机の下にしゃがみ込む瞬間、背中に何かを打たれ、「うっ」と息が詰まり、しばらく気を失っていた。気がつくと廊下の窓際につかまっていた。やっと地下室に辿り着いたら、収容していた患者は全員無事で「あー」と言って手を握り合った。しかし、A看護師はおなかの上に梁が落ちてきて治療室で亡くなっていた。

患者の顔を見たら、髪は煤で汚れて逆立っていた。洗濯室の蛇口を捻ると水が出たので、口を濯ぎ、バケツに水を汲み、タオルを湿らして患者の顔を拭いた。

私の背中の傷は翌朝には血がとまったが、胸が痛くて呼吸をするのもきつかった（肋骨骨折とガラス破片創）。

3. 原爆投下後の救護活動

1) 大学病院での活動：10、11日はガーゼのはいった大きなケッテル缶を持ち、医師とともに負傷者がいる病院玄関、地下室、防空壕で傷の手当をしながら1日中走り回った。

2) 救護所での活動：12日は調 来助教授を中心に、医師、学生、看護婦など15～16人で疎開先の滑石に救護所「岩屋クラブ」を開設した。学内の重傷者を安全かつ十分に治療するためであった。疎開していた医療



図1 原爆被爆直後の附属病院

器具とリヤカーで運び出した数少ない衛生材料での救護活動であった。注射器やピンセットの消毒は洗面器に井戸水を入れ、七輪にかけて煮沸した。ガーゼはそのまま使うほか仕方がなかった。救護所を開設するとすぐに往診の注文が殺到した。午前中は治療に来られる方々で、午後の往診は夜になることもあった。

片足がガス壊疽で腫れた男性の手術を行った。学童机を並べて手術台にし、疎開した手術用器具に切断用の器具はなかったので、近所の家から大工用の鋸を借りてきてもらい、無事手術を終わった。器械の消毒は川の水を沸騰させて器械の先の方を消毒し、ガーゼも煮沸して絞ってから使った。

収容した方が血便を出され、伝染病ではないかと部屋の隅に隔離したり、また時間を問わず次々に亡くなられ、クラブ前の田園で火葬を行った。

壊滅的な被害をうけ、仲間を亡くし、絶対的なマンパワー不足・医療器材不足の状態の中で、看護を続けなければとその使命感に動かされ、わが身も顧みず働き続けた。

参考資料

- 1) 長崎医科大学附属病院看護婦原爆被爆体験編集委員会. 夾竹桃よ永遠に：原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ. 長崎医科大学附属病院看護婦原爆被爆体験編集委員会, 長崎, 1990.
- 2) 公益社団法人長崎県看護協会看護の継承特別委員会. 原子爆弾投下災害看護のあゆみ. 2012.
- 3) 長崎大学医学部創立 150 周年記念会. 長崎大学医学部創立 150 周年記念誌. 2009. p. 154.